

聖書組曲

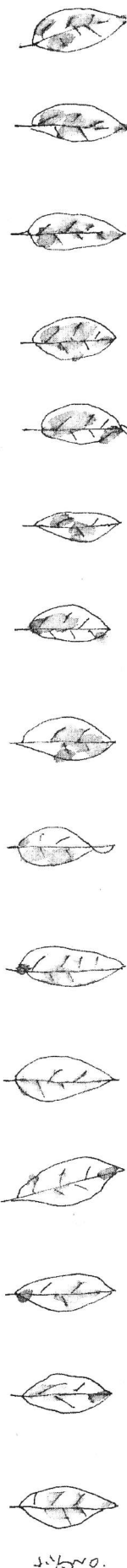
第14回

イエスが示された 真の愛、真の平和

山元眞

行橋カトリック教会司祭

やまもと・まこと



以前、イタリアにいたところ、三年

間毎年、北イタリアの高原にある

ロッツォという小さな村でクリスマス

スを過ごした。その主任司祭は、

ローマで勉強している学生の神父や

シスターを呼んで一緒にクリスマス

を祝っていた。聖堂の中に山から切

り出してきた木で大きな馬小屋が作

られる。よくある小さな「馬小屋

セツト」ではない。聖堂の内陣を包

み込む大きな馬小屋。その中央には

飼葉桶を模した祭壇がある。その

祭壇を囲んでミサ、最後の晩さんの

記念が行われるのである。この馬小

屋のスケールの大きさには驚いたが、

主任司祭の解釈と説明には、もつと

驚いた覚えがある。「イエスは生ま

れてからすぐ、飼葉桶に寝かされ

たんだよ。その幼子イエスは後に十

字架に磔^{はりつけ}にされて殺されることに

なるが、前の晩に、弟子たちと最後

の食事をした。そのとき、パンとぶ

どう酒を自分自身として弟子たちに

与えた。その食事の記念がミサだか

ら、飼葉桶の祭壇を作って、その

上でミサをする。イエスは食べられ

るために来たんだよ。祭壇で、わた

したちは、イエスという《えさ》を

食べていきるんだよ」



る組曲のようなもの。その一つひと

つの書き物もまた、組曲のようなも

の。弟子たちから弟子たちへ伝えら

れたイエスの言葉と行いは、福音書

というかたちで編集されたが、その

福音書もひとつの組曲のようなもの

である。そこには、さまざまなテー

マを読み取ることができる。そのひ

とつは「神は、わたしたちに食べら

れる」というテーマ。

導入の曲は次の言葉。

「マリアは月が満ちて、初めての

子を産み、布にくるんで飼葉桶に

寝かせた(ルカ福音書一章六―七節)

終わりの曲は次の言葉。

「一同が食事をしているとき、イ

エスはパンを取り、賛美の祈りを唱

えてそれを裂き、弟子たちに与えな

がら言われた。『取って食べなさい。

これはわたしの体である。』(マタ

イ福音書二十六章二十六節)

この二つの曲のあいだには、ほか

にたくさん曲がある。その曲はイ

エスがいろんな人に食べられたこと

を表している。たくさんの人々に。

飢えた人々に食べられたことを。

クリスマスは年に一度祝われる。

日本でも「お祭り」としてすっかり

定着した感があるが、一時的なこと

である。そのシンボルはツリー、

パーティー、ケーキ、プレゼント、

サンタクロース。しかし、飼葉桶

がそのシンボルになるまで、救い主

イエス・キリストの誕生を祝う「降

「誕生」が定着したとはいえない。しかし、それでも、この祝いは始まりにすぎない。イエスが生まれた後、



どのように人々から食べられていったのかを見ていくとき、この出来事の真の意味がわかってくるのである。

クリスマスは年に一度祝われるが、最後の晩さんの記念であるミサは、毎日、世界中で行われている。ミサの中で、イエスの言葉が読まれ、人々はその言葉によって癒され、励まされる。人々はこの食卓からイエス自身を食べ、生かされる。

貧しい人々、その中でも特に貧しい人々のために生涯をささげた福者カルカッタのテレサ（マザー・テレサ）の活動の源泉は、まさにこのミサにあった。福者テレサは毎朝ミサに参加して聖書を通して語られる神の言葉を聞き、キリストの体である「聖体」を食べる。それから、食べ物に飢え、愛に飢えている人々のところに出かけていく。自分が食べたイエスと共に。そのテレサがまた、飢えた人々に食べられるのである。イエスと共に。

二千年前に神が人となった。その人が世を救う。神と人との間にあった壁を、イエスは取り除いた。神と人との間の距離を、イエスは縮めた。

縮めたというより、その距離をなくした。近づいた、というより神と人がひとつになった。神は食べられることによって、わたしたちとひとつになった。こうして、神が人と共に人の中にいるということ、人は実感することができるようになった。

バリアフリーという言葉がある。

障壁、つまり壁がないこと、邪魔するものがないことを意味する。神と人の間はバリアフリーになった。もう、何も邪魔するものがない。神は遠い存在ではなく、人の近くに、人の中に共にいてくださる。イエスはこのことを教えた。この神を信じる人の集まりが教会である。そこには、神と人を隔てるものはないはず。人と人を隔てるものもないはず。すべてが平等で、差別のない世界であるはず。それは神が望まれた世界。わたしたちが住んでいるこの世界

には、いつの時代も紛争が絶えない。今もまた、世界は戦争の危機を孕んでいる。多くの人が、世界中のほとんどの人が神を信じているにもかかわらず、争いが絶えない。持っている者が持っていない者を支配し、搾取する。そこからまた、飢えが広がっていく。満たされない人が増え、満たされない世界が広がっていく。

飼料葉桶に寝かされた幼子。死ぬ前に自分を食べ物として与えたイエス。十字架の上で、与え尽くすことが真の愛であることを示されたイエス。ここに平和の源がある。奪つことではなく与えることに、握るのではなく広げること、手に入れることではなく手放すことに真の平和があることを示した神。真の愛は自分を与え、食べられることを求める。

ミサを司式しながら「取って食べなさい。これは、わたしの体である」というキリストの言葉を繰り返すたびに、「こんなわたしでもよかったら、どうぞ、食べてください」と心の中でつぶやいている自分に気づく。「どうにでもしてくれ。煮ても焼いても」と。

光

工藤一麦

光を求めよう

光を求めつづけよう

こぼれ落ちる涙さえ

光が

すいとおつてくれるよ

月刊
詩誌

雲と麦

同人
募集

- 同人は全国におり、詩作を志すことで人生を、より正しく生きようとする初心者向きの会です。
- 全作品に評をつけて掲載します。
- 見本誌と会則は切手か現金千円で送ります。

〒133-0057

東京都江戸川区西小岩

三三三三二〇

雲と麦詩人会・あ係